

書評

マシュー・エリス (2018) 『砂漠の境界地域：近代エジプトとリビアの形成』スタンフォード
Ellis, Matthew H. (2018) *Desert Borderland: The Making of Modern Egypt and Libya*, Stanford *

天野 佑紀 AMANO, Yuki

京都大学大学院文学研究科修士課程

ISILをはじめとする過激派組織の台頭や、サハラ地帯の政情不安定化など、現代世界に暗い影を落とす中東・アフリカ地域の情勢に鑑み、解決の糸口を示す学問への要請はますます高まっている。その中でも歴史学は、こうした情勢を植民地体制下の過去との関わりから考えるために有意な示唆を我々に提供するだろう。先の要請が歴史学に与える最も重要な検討課題の一つとして、多様な民族・文化が交錯する同地域において、近代的な国家がいかにして成立し、そしてそのことが現地社会にどのような影響を及ぼしたか、が挙げられる。この課題に応えようとする本書は、19世紀から20世紀初頭までのエジプトを事例に、東部サハラ砂漠における対リビア境界が実体を持つまでの軌跡を辿ることで、上記の問いを解明しようとするものである。

近代以降の国家形成にかんする問題は、その端緒となる国民国家論の発展を辿る上でアンダーソンと並び評されるウィニッチャクンの著書が邦訳されていることからわかるように、日本においても長年にわたって関心が注がれてきたテーマである (Anderson 1983; Winichakul 1994)。但し、ウィニッチャクンが先鞭をつけた、国家地図の変遷から為政者の国土認識を読み解くアプローチをはじめ、これまでの研究が記述してきた歴史の多くが、国民国家の想像範囲から漏れ出やすく、画される境界によって離散を余儀なくされる一部の人間集団が不在の状態にあるという欠点を抱えていた (Wendel 1972; Fahmy 2011)。一方で、国家のみならず様々な権力保持者によって実践される境界政策及びその受容体たるローカルな人間集団に目を向けることで、政治境界線の画定に先立って生成する「境界地域 (borderland)」を浮き彫りにする本書は、従来の研究を社会史的アプローチによって精緻化する野心的なモノグラフだと位置付けることができるだろう。

内容に入る前に、「領域性 (territoriality)」あるいは「境界地域」といった本書で頻出する用語について付言しておきたい。まず「領域性」について。分析概念としての領域性を提唱した人文地理学者サックによれば、人間の領域性とは「地理的な区域を区切る、ないしはそこへの管理を主張することによって、人々・現象・関係に影響を与え、それらを制御しようとする個人や集団の試み」のことであり、専ら史学研究においてもこの用語法が踏襲されることが多い (Sack 1986: 19-21)。著者の射程は、サックが想定する、権力者による働きかけとしての人間の領域性を、現場で「経験」する人間集団にまで開かれている。本書が従来の研究と一線を画するのはまさしくこの点による。

* Ellis, M. H. (2018) *Desert Borderland: The Making of Modern Egypt and Libya*, Stanford: Stanford University Press.

また、境界を巡る概念用語についても明瞭な使い分けがなされている。この点にかんしては著者が2015年に発表したレビュー論文の中で簡潔にまとめられているため、そちらを参照しながら予め確認しておきたい (Ellis 2015)。第二に「境界地域」とは、地図上における国家領域の識別を可能にする「境界 (border)」あるいは「国境 (boundary)」と対置され、領域を一様に画す線ではなく、帯状に広がるゾーンを意味する。また単に文化的・地理的にボーダーレスなゾーンを指す「フロンティア (frontier)」とも異なり、境界地域は、複数の権力間で領有を争われるゾーンであることが大きな特徴となる (Ellis 2015: 412-414)。

本書では、以上の特徴を持つ地域として取り上げられる東部サハラ砂漠を主たる舞台とし、領域性概念の応用によって、政治境界線の画定に先立って「境界地域」と「境界づけられたアイデンティティ (bordered identities)」が同時生起的に現出することが明らかにされていく。また、時代背景について付言しておけば、本書が扱う19世紀後半から第一次世界大戦までのエジプトは、1841年にオスマン帝国から事実上の独立州となったムハンマド＝アリー朝の開始、1882年のイギリスによる占領を経ている。そのためエジプトにおいて、スルタン、ヒディーヴ (Khidīw, 英 Khedive)、イギリス人総領事と、三者の権力主体が並立した時期に当たる (Ellis 2018: 10)³¹。史料としては、エジプト、イギリスの文書館に所蔵される行政官の報告書類をはじめとする行政文書を中心に、周縁地域におけるエジプト主権の行使に際して主導的役割を果たした人物の行動を子細に示す未公開の個人文書コレクションや回顧録、また、エジプトと境界を接するリビアの動向を把握するためにイタリア及びトルコの文書館で収集された外交文書などが用いられる。

それでは、目次の引用をもとに本書の内容を確認していこう。

序章	領域的エジプトの再考: 1-12
第1章	エジプト境界地域における法的例外主義: 13-39
第2章	シーワにおけるエジプト主権の適応: 40-60
第3章	アッバース・ヒルミーII世とシーワ殺人事件の構造: 61-86
第4章	砂漠西部における領域主権の培養: 87-115
第5章	東部サハラ砂漠におけるオスマン主権の境界: 116-146
第6章	エジプト西部国境紛争の現出: 147-174
終章	揺れ動くエジプト-リビア国境: 175-188

³¹ ヒディーヴとは、ムハンマド・アリー朝期に君主を指して用いられた称号である。オスマン帝国のスルタンは、1867年にこれを称号として承認し、事実上の独立状態が公式に承認された (Ellis 2018: 10, 193)。

プトの主権行使に際してローカルな権力者が果たした役割が究明される。具体的にはエジプト-リビア境界地域を横断的に活動するサヌーシー教団が取り上げられ、エジプトのシーワ統治に対する同教団の影響力に接近することが本章の課題になる。

内容に入る前に、サヌーシー教団について簡単に紹介しておきたい。サヌーシー教団は、イスラーム神秘主義を奉ずる教団であり、当該時期には現リビア西部に位置するオアシス都市ジャグバークに本拠を置いた (Ellis 2018: 42)。サヌーシー教団はオアシス都市に教団支部としての役割を担うザーウィヤ (*zāwiya*) によって思想ネットワークを広げた。民族誌の知見によれば、ザーウィヤは 1902 年までに北アフリカからヒジャーズ地方にかけて広範囲に分布し、その数は控えめに見積もっても 147 を数えたという (Evans-Pritchard 1945: 183)。ザーウィヤには共通して地元の子ども用の学校、旅行者を無償で泊めるゲストハウス、ザーウィヤの首長、教師や官吏として現地に常駐する者のための居住区、あるいはモスクなどの施設が整備されていた。そして教団の本拠が置かれ、規模の面で最大であったジャグバークのザーウィヤには、およそ 600 人を収容するモスクを構えるとともに、8000 冊を超える蔵書を誇る図書館を有した。本章の関心事であるシーワとの繋がりについていえば、ジャグバークのザーウィヤにはシーワ出身者を収容するために特設された施設も存在したという。各ザーウィヤは、ローカルな首長が独自の政治権限を付与されたが、教団本部は毎年ジャグバークにて開かれる規律委員会 (*council of order*) にて彼らを招集するとともに、年に一度ジャグバークのザーウィヤへの貢ぎ物を求めることで統率を図った (Ellis 2018: 43-44)。

それでは本書の内容に戻ろう。1896 年、シーワにおける無秩序を許容できなくなったエジプト政府は、新たな官吏としてムスタファ・マヘル・ベイを派遣した。ここで注目されるのは、マヘル・ベイの派遣による中央政府からシーワに対する締め付けの強化ではない。むしろ著者は、翌年にマヘル・ベイが導入した新税制、及びシーワ評議会に導入された新司法制度などの諸改革の遂行にあたり、サヌーシー教団 (*al-Ṭarīqa al-Sanūsīya*) の影響下にある現地住民の首長が媒介となっていたことを強調する (Ellis 2018: 50-54)。即ち、エジプト政府による改革がシーワにもたらしたのは、中央集権的な体制への包摂ではなく、領域横断的なサヌーシー教団の庇護のもとで活動するローカルな首長が維持してきた慣習的な権力を、統治体制の中に体系化することだったのである (Ellis 2018: 60)。このように第 1-2 章でなされたのは、ローカルな次元において中央政府の発した命令が形状を変える様を示すことによって、国民国家の理念型とは合致しない、エジプト主権の多様なあり方を提示する試みであった。

第 3 章では、引き続きシーワを事例としつつも、イギリス保護下で実権を失っていたヒディーヴのアッバース・ヒルミー二世 (*‘Abbās Ḥilmī bāshā*, 在位: 1892-1914) がローカルな次元で維持した影響力が究明される。具体的には、ヒルミー二世による復権の試みが検討され、辺境たる砂漠地帯におけるエジプト政府と一線を画す独自権力の存在を明らかにすることが本章の目的となる。

1906 年、ヒルミー二世が敢行したシーワ遠征の目的は、現地の有力者の買収、農業開発候補地の調査、の二つであった。以降、水源開発やモスク建設がヒルミー二世主導で進められるが、そ

の円滑な推進には、現地住民とヒルミー二世の私的な紐帯、及びヒルミー二世個人の権威発揚と不可分であったことが指摘される (Ellis 2018: 65-74)。また、1909年のエジプト官吏殺害事件は、一見すると中央政府によるシーワの締め付けを強化するものだったが、著者の徹底した史料批判により、先のような文脈の中で、ローカルな次元におけるイギリスの存在感が高まることを恐れたヒルミー二世を中心に行われた折衝によって穏当に事態が收拾されていたことが明らかにされた (Ellis 2018: 75-80)。

第4章では、当該時期に、「未開発地を有効活用すること」の意でフランスが発信源となって流布した「価値付加 (*mise en valeur*)」イデオロギーと領域性の関係性が検討される。ここで明らかにされるのは、マリユト鉄道建設事業が、それを推進するヒルミー二世の現地住民に対する支配の正当化を媒介する機能を果たしていたことである³²。

新たな領土獲得が限界を迎え、既得の植民地を開発することで帝国の繁栄を目指す「価値付加」イデオロギーが支配的な時代潮流の中で持ち上がったマリユト鉄道建設事業は、エジプト政府ではなく、ヒルミー二世の個人的な意向によって推進されたものであった。ヒルミー二世は事業の価値と自身の存在感を喧伝することで、現地住民からの支持を集めると、現地住民の中には、ヒルミー二世によるオアシス支配をイギリスに対する防波堤として捉える者さえ現れた。自身の支配範囲拡大を志向するヒルミー二世は、開発の担い手たる自身の権威を現地住民に発揚することで、マリユト鉄道建設事業を自身の権力装置として機能させた。こうして、エジプトのそれとは異なる支配権力が現出したのである (Ellis 2018: 113-114)。

第5章では、エジプトの自治権獲得以降もその主権範囲が曖昧なままだった東部サハラ砂漠が、複数の権力が重なり合う「境界地域」として変容するまでの萌芽的段階が示される。辺境における出来事を中心に記述されてきた前章までとは異なり、本章と続く第6章では、よりマクロかつダイナミックな視角から境界地域の生成過程が検討されている。

政治境界線が存在しない東部サハラ砂漠が、帰属の問題を惹き起こす境界地域へと変容し始めたのは即ち、以下のプロセスを経ていた。リビア・バンガージー地方では、オスマン帝国支配から逃れることを企図したベドウィン族によるエジプト越境が頻発していた。名目上は帝国の範疇に含まれるはずのエジプトにおいて主権を行使する能力を既に失っていたオスマン帝国であったが、ローカルな次元において、現地官吏はこの事態を甘受していたわけではなく、ベドウィン族のみならずあらゆる越境者に対して課税や通行許可制度を整備することで、支配の及ばないエジプトに向かう者への統制を試みた³³。こうすることで、明瞭な境目が存在せずとも、リビア-エジ

³² 著者によれば、マリユト鉄道事業は北部海岸部に沿ってアレクサンドリアとリビアを繋ぐことを目的に開始された。実際にヒルミー二世在位期間中に到達し得たのはリビアに遠く及ばず、マールサ・マトルー (Marsa Matruh, 図1参照) までであったという (Ellis 2018: 89)。

³³ 本書では、デフネ (Defne) という港湾都市に設けられた制度 (Derbend-i Defne) の事例が取り上げられている。元はオスマン帝国政府によって設けられた公式の税制度であり、家畜1頭につき3-4クルス (オスマン帝国で使用された通貨の一種) がかけられていた。著者は、バンガージーに駐在したイギリス人地方総督ジャスティン・アルヴァレスら行政官の報告書の記述に基づき、

プトの分別がより意識されるようになった。そして、所与の都市ごとにエジプト、バンガージーのいずれに属するかを分別する意識の興りそのものが、砂漠が境界地域へ変質しつつあることを告げていたのである (Ellis 2018: 141-142)。

第 6 章では、1911-1912 年のイタリア＝トルコ戦争までに、ベドウィン族同士の抗争に対してエジプト、オスマン両国がどのように対処したかが考察される。のちに政治境界線の画定を加速させるイタリア侵攻に先立つ約 10 年の間に、現地住民を媒介とするエジプト＝オスマン間の駆け引きによって顕在化し始めた、境界の「輪郭」を浮き彫りにすることが本章の目的となる。

1904-1905 年、1906-1907 年と断続的に部族間抗争を興したベドウィン族は、エジプト、オスマンのいずれかに調停と庇護を求める必要に迫られた。この要請に応えることで東部サハラ砂漠において覇権を握り始めたエジプトに対し、オスマン帝国はサルーム (Sallūm, 英 Sollum) に対する割譲要求をもって応えた。しかしながら、両国ともに外交的な手段を用いた最終解決、即ち主権範囲の明瞭化を要望することはなかった。なぜなら、柔軟かつ係争含みの状態を継続することで、「向こう側」への介入を不可能にしてしまう政治境界線の画定が避けられたためである。またそれゆえにこそ、東部サハラ砂漠は「境界地域」への変容を迫られたのである (Ellis 2018: 173-174)。

終章では、本論で扱われなかった第一次世界大戦以降の東部サハラ砂漠における国家形成プロセスがエピローグ的に示されたのち、本書全体を通じた結論が開陳される。

イタリアによるリビア侵攻は、境界地域たる東部サハラ砂漠にとって一大画期となった。この事態を受け、イギリス-イタリア間で外交交渉が始まると、遂に 1925-1926 年の二度にわたる協定締結の末、エジプト-リビア政治境界線が画定した。こうして複数の権力が重なり合う「境界地域」は、正式に「境界線で画された地域 (bordered land)」へ姿を変えた。

本書が一貫して描き出してきたのは、無形の東部サハラ砂漠において明瞭な境界が顕在化する過程であると同時に、領域の現場を生きる現地の住民が、単一にして不可分な国民国家の理念型と、多次元・多様な権力者の思惑が交錯する現実の狭間で、アイデンティティの選択を余儀なくされていく過程でもあった。中東・アフリカ地域において今なお残る現地住民の離散やテロリズムの問題に鑑みると、その境界線を巡る歴史は常に問い直され続けているのである。

以上が本書の内容となる。19 世紀初頭のアリー体制成立以来、国家領域が曖昧模糊としてきたエジプトにおいて、社会的な次元で境界が実在となりゆくさまを描き切った本書の意義は大きい。一国史的なエジプトの国家形成理解に対して批判的立場をとり、近代的領域は多次元・多様な権力者の相互作用の中で漸次的に形成されるという著者の主張は正鵠を得ている。研究手法の面で特筆すべきは、類似する研究がしばしば陥りがちな、視点の偏向性にかかわる問題を克服している点にあらう。帝国史研究が史料手続きの問題と密接不可分なのは、より豊富な文書史料を残す

現地の官吏によってこれが私的に運用され、越境者に対する独自の課税制度へと変容していたことを指摘している。なお、このデフネという街が現在のリビアのどこに位置するかを正確に特定することは困難であるという (Ellis 2018: 132-133)。

「支配者」側の視点に多くを依拠することに起因するのは論を待たない。他方、本書の記述は、イギリス、エジプト、イタリア、トルコなどの各文書館で蒐集した未公刊史料に加え、アッパース・ヒルミー二世などの個人文書をはじめとする膨大な史料とその鋭い史料批判によって裏付けられている。更には、文書史料を残さないことからその動向把握が困難な遊牧民ベドウィン族をはじめとする現地住民についても、ヒルミー二世のように国家権力と周縁地域を媒介する権力者に着目することで、間接的ながら彼らの「主体性」を析出することに一定程度成功している。こうして取り入れられた視点の複数性によって各集団への眼差しが平衡に保たれている。このことに鑑みれば、現地社会に生きる人間集団の動向分析を可能にする「領域性を生きる経験」概念の有用性がより説得力を増しているのである。

このような本書の意義を認めたいうえで、なお批判すべき点があるとすれば以下の諸点になる。

まず、各章が有機的に結びついていないという問題がある。本書の章は、主にシーワを事例とするローカルな次元におけるエジプト主権の行使のされ方から（第1-2章）、アッパース・ヒルミー二世が辺境で築きあげた独自権力の存在に焦点が当てられると（第3-4章）、最後はナショナルな次元へと移行し、より境界生成のダイナミズムが感じられるように構成されている（第5-6章）。こうした構成自体は、境界地域の生成を諸権力による領域的な実践に加えて、現場を生きる人間集団による「経験」を考察するという本書の方向性と合致したものになっている。しかしそれだけに、サヌシー教団やヒルミー二世の例で示されたようなエジプト・イギリスとは異なる権力の存在が、境界地域の顕在化によってどのように弱体化していったかにも言及すべきではなかったか。この説明の欠如によって、とりわけ第4章までと第5章以降の部分がやや乖離した印象を受けるのである。

また、辺境の出来事をどのように位置付けるかについての問題もある。本書の序盤で主な舞台となったのはオアシス都市のシーワであり、この事例が本書の出発段階として、エジプト境界の曖昧さを代表する空間の例として挙げられている。ところが、その比較対象として第1章でハルガについて簡便に触れられた程度であり、この現象が同時代の東部サハラ砂漠においてどれほど普遍性をもつのか、有意な言及がなされていないようである。ないものねだりではあるが、ややもすれば例外として片付けられかねない事例を用いて主張を強化するのであれば、シーワを中心に記述しつつも、その比較対象となるオアシス都市の状況にも適宜触れるなどの配慮が必要であったらう。

以上、気にかかった点を幾つか挙げてきたが、これらの評価は本書の価値を下げるものではない。むしろ残された課題は後進の研究によって克服されていくべきだろう。それでは、様々な位相の人間集団による「経験」の考察を通じて単一の領域を持つ国家の形成過程を可視化する本書は、他のフィールドを専門とする研究者たちに何を示唆しているだろうか。最後にこの点について述べておきたい。本稿では、北アフリカに位置する仏領アルジェリアを例に考えてみよう。現アルジェリア共和国を形作る国土のうち、南部サハラ地帯で隣接する諸国家との政治境界線が画定したのは、フランス植民地期のことである。オスマン帝国属領期アルジェリアの版図には含ま

れていなかった現アルジェリアのサハラ部分（以下、アルジェリア・サハラと表記）は、こうして文字通りフランス帝国によって「創造」されたわけである。従来のアルジェリア近現代史研究では、サハラ砂漠への侵攻や統治という従属関係の解明に関心が注がれ、アルジェリア・サハラは一方的に「創造」された領域として描かれてきた (Frémeaux 1993; Brower 2009)。しかし、帝国権力が整備した行政区分を前提としながら歴史叙述されてきたために、現場に残る他地域との紐帯が等閑視され、「創造」されたアルジェリア境界が半ば自明視されるという矛盾に陥っていた。近年では、近代地図学によるサハラ認識の進展と植民地主義の関係性の検討から、サハラ侵攻前後の仏領アルジェリアにおいて断続的に生じた政治境界線の変容を明らかにしたブレや、アルジェリアの境界を越えたイスラーム・イバード派の知的ネットワークが、近代的な主権国家の成立とともに衰退する過程を描出したジョミエなど、従来の理解を刷新する研究が現れ始めている (Blais 2014; Jomier 2016)³⁴。フランス植民地主義の過去がアルジェリアの歴史をいかにして規定してきたかを考えるためにも、本書が提起する「領域性を生きる経験」という視角は十分に応用されうるのである。

以上、評価と合わせて本書が提示する分析概念の応用可能性について述べてきた。いずれにせよ本書は、新たな分析視角の導入とともに、膨大な史料蒐集とその緻密な分析に基づく独自の歴史像を描き出した労作である。著者の労に敬意を払いつつ、植民地帝国とその領域・境界にかんする研究がいつそう発展することを期待したい。

参考文献

- Anderson, B. (1983) *Imagined Communities: Reflected on the Origins and Spread of Nationalism*, London: Verso.
- Blais, H. (2014) *Mirage de la carte. L'invention de l'Algérie coloniale, XIXe-XXe siècle*, Paris: Fayard.
- Brower, B. C. (2009) *A Desert Named Peace: The Violence of France's Empire in the Algerian Sahara, 1844-1902*, New York: Columbia University Press.
- Ellis, M. H. (2015) "Over the Borderline? Rethinking Territoriality at the Margins of Empire and Nation in the Modern Middle East (Part 1 and 2)", *History Compass*, 13 (8): 411-434.
- Evans-Pritchard, E. E. (1945) "The Distribution of Sanusi Lodges", *Africa: Journal of the International African Institute*, 15 (4): 183-187.
- Fahmy, Z. (2011) *Ordinary Egyptians: Creating the Modern Nation through Popular Culture*, Redwood City: Stanford University Press.
- Frémeaux, J. (1993) *L'Afrique à l'ombre des épées 1830-1930, t.1: Des établissements côtiers aux confins sahariens*, Paris: SHAT.
- Jomier, A. (2016) "Les réseaux étendus d'un archipel saharien. Les circulations de lettrés ibadites (17^{ème}

³⁴ イバード派とは、イスラーム・ハワリージュ派の分派である。今日では全ムスリムの約1%を占め、オマーンやアルジェリア南部にコミュニティが存在する (Jomier 2016: 17)。

siècle-années 1950)”, *Revue d’histoire moderne & contemporaine*, 63 (2): 14-39.

Sack, R. (1986) *Human Territoriality: its theory and history*, London and New York: Cambridge University Press.

Wendel, C. (1972) *The Evolution of the Egyptian National Image: From Its Origin to Ahmad Lutfi al-Sayyid*, Berkeley: University of California Press.

Winichakul, T. (1994) *Siam mapped: A History of the Geo-body of a Nation*, Honolulu: University of Hawaii Press.

【謝辞】 アラビア語の転写表記については、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の末野孝典氏にご助言をいただいた。ここに感謝申し上げます。

(あまの ゆうき 京都大学大学院文学研究科)